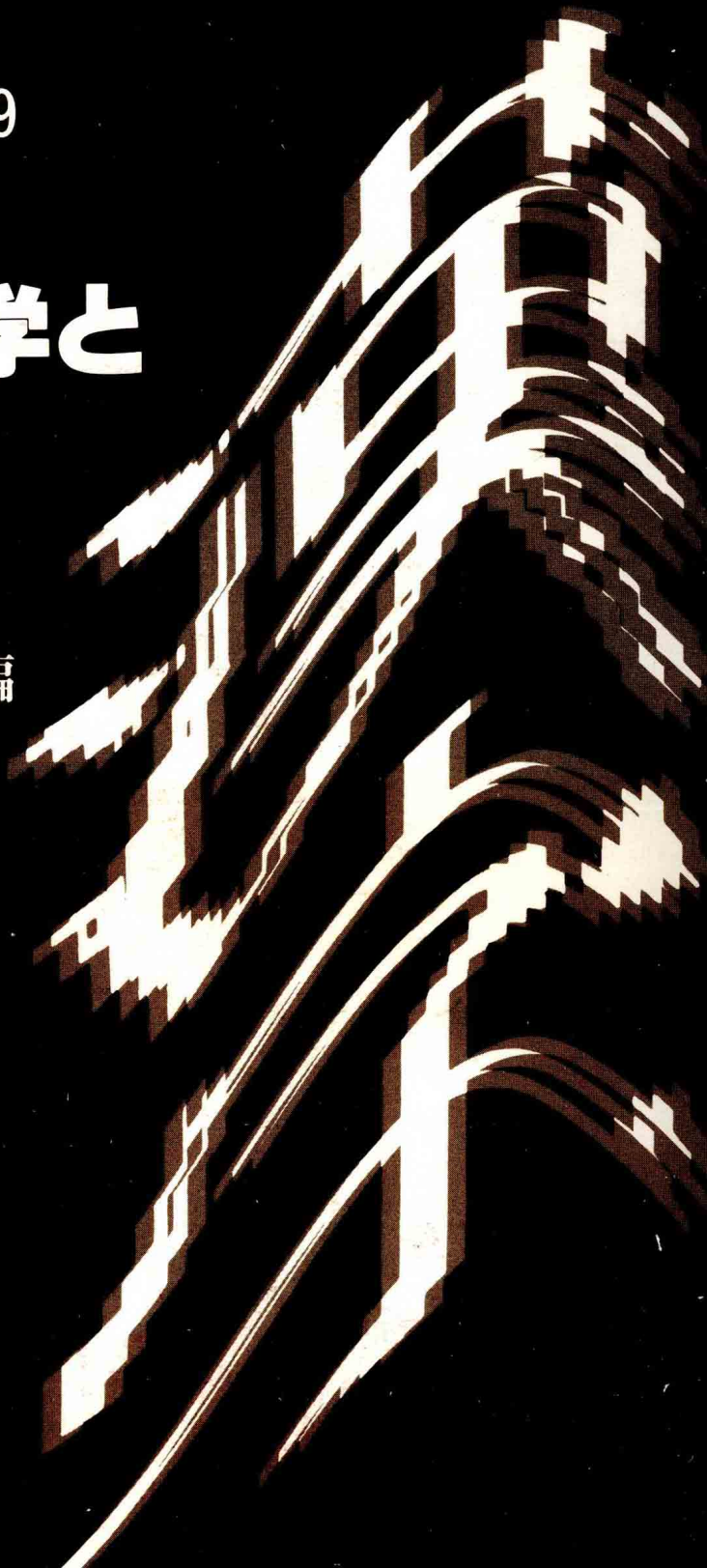


漢字講座＝9

近代文学と 漢字

佐藤喜代治 編

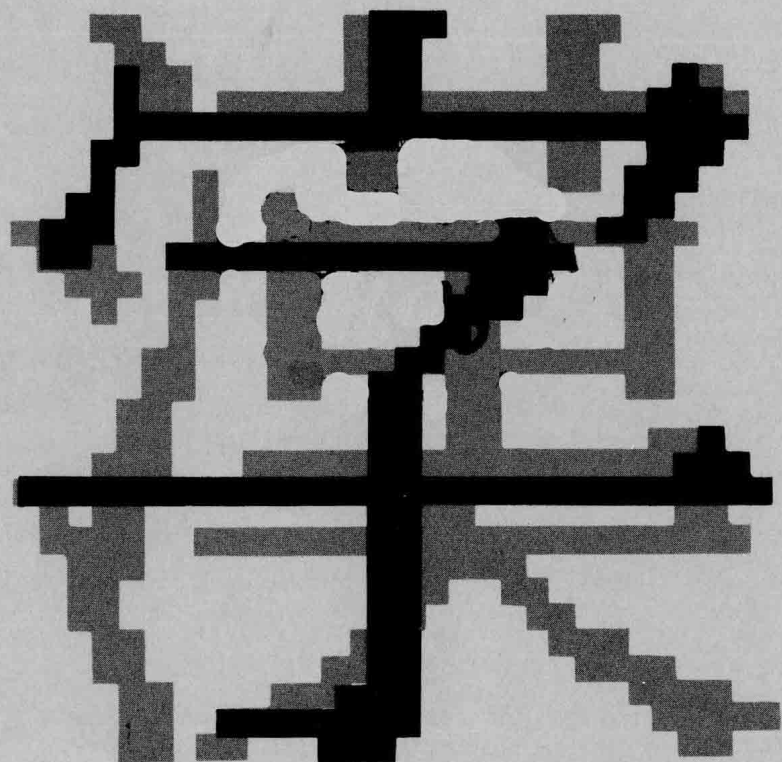
明治書院



漢字講座 = 9

近代文学と漢字

佐藤喜代治編



明治書院

漢字講座

編者

佐藤喜代治

編集委員

遠藤好英

加藤正信

佐藤武義

蜂谷清人

飛田良文

前田富祺

第9巻 近代文学と漢字

定価 3,200 円

昭和63年6月25日 印刷

© 1988 Kiyoji Sato

昭和63年6月30日 発行

printed in Japan

編者 佐藤喜代治

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中忠



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号 101

電話 (03) 292-3741 (代) 振替口座 東京 3-4991

ISBN 4-625-52089-4

星共社製本

編集のことは

中国において発達した漢字が、わが国に伝えられて後、長い歴史を通じて、日常の生活を始め、文化のあらゆる分野に深いかかわりをもってきたことは改めて言うまでもない。わが国では、中国と違って、仮名が発達したために、漢字の地位が絶対的なものでなくなつたとは言え、その重要さが減じたわけではなく、字音・字訓、また、振り仮名・送り仮名など、中国とは異なる、複雑で困難な問題が加わつたと言ふことができる。明治以来、国語国字問題が盛んに論議され、言語・文字の改革も何度か実行に移されてきたが、その中心の問題は常に漢字にあったと言ふことができる。漢字はいわゆる表意文字で、語と直接に結びつく、表語文字というべきものであり、単に文字として言語から切り離すことができず、国語と緊密な関係を保つところにその重要さが認められる。

漢字の研究は、従来、おもに漢字の専門家によつて進められてきた。国語の研究でも、古典研究の基礎として漢字を研究することが行われ、漢字音・訓点語・古辞書などの研究に見るべき成果をあげてきたが、漢字を国語との関連において系統的に研究することは十分に行われてはいない。

この講座において、漢字が国語の中でどんな役割を担っているか、漢字と仮名とがどのように使い分けられるか、漢字の性格と国語との関係を明らかにするとともに、従来、漢

字についてどんな研究が行われてきたかを顧みて現在の課題を考え、次に、古代から現代に及ぶ、それぞれの時代について主要な資料を選んで漢字使用の実態を概観し、さらに、機械化による情報手段の急速な進展に伴って、漢字は今後どのような革新を経ることになるか、国語教育、ないし日本語教育において漢字の指導をどのように行えばいいかなど、実際の問題を究明したいと考えている。執筆者各位のご厚意により、漢字の種々多様な問題について、過去から現在に至る実態を概観し集約するとともに将来をも展望して、漢字研究の進歩に資し、かつ、国語問題の解決、教育の向上に役立つことを念願するものである。

なお、各巻末に加えた付録では、漢字の様相を種々の側面から一覧して、漢字に対する理解を深めることができるように配慮した。

昭和六十二年三月

佐藤 喜代治

もくじ

近代文学と漢字

遠藤好英

1	はじめに.....	一
2	漢字表記の混乱から統一へ.....	三
3	近代の国字——意欲的な試みと合理的造字法——.....	八
4	多様なあて字.....	一五
5	白話由来の漢字・漢語——近代文学における白話の位置——.....	二五
6	近代の訓の性格——「刷る」の成立をめぐって——.....	三〇
7	むすび.....	三三

『安愚楽鍋』の漢字

飛田良文

1	登場人物と漢字.....	三五
2	人物別の使用語彙の表記.....	三七
3	武士・商人・職人の語種と漢字表記.....	四五
4	文明開化期の和語の漢字表記.....	七〇

『牡丹燈籠』の漢字

清水 康行

1	文字資料としての『恠談牡丹燈籠』……………	七五
2	『恠談牡丹燈籠』における自称詞・対称詞の漢字——多様な表記と書き分けの一例として——……………	八〇
3	残される課題……………	九二

翻訳文学の漢字

米川 明彦

1	明治初期の翻訳文学……………	九五
2	漢字の含有率と用法……………	九七
3	音の種類……………	一〇〇
4	語と表記のゆれ……………	一〇四
5	あて字……………	一〇七
6	軸 字……………	一一〇

二葉亭四迷の漢字——『浮雲』における字法——

半沢 幹一

1	言文一致と漢字・漢語……………	一二四
2	漢字表記率……………	一二七
3	草稿と初出本の漢字……………	一二三
4	俗語と漢字……………	一二五

5	漢語と振り仮名	130
6	会話文の漢語	134
7	『浮雲』における字法	140
鷗外と漢字——初期作品、とくに『舞姫』を中心に——		
	蒲生芳郎	
1	鷗外の漢学的素養	143
2	漢字表記の抑制の傾向	146
3	『舞姫』の字音語	151
4	『舞姫』の外来語・翻訳語	154
5	『舞姫』の字訓語	157
尾崎紅葉・幸田露伴の漢字——『多情多恨』と『五重塔』——玉村文郎		
1	はじめに	163
2	予備的考察	164
3	各種の徴標	168
4	紅露の文字観	182
5	むすび	184

夏目漱石『こゝろ』の漢字表記およびその背景

橋 浦 兵 一

- 1 標題(固有名詞)としての「心」「こゝろ」——そして「自然」……………三八
- 2 「先生」「私」——また「告白」「自白」「白状」「懺悔」「述懐」……………九五
- 3 「殉死」——また「洋机」など約二〇種の外来語表記……………九六
- 4 同義異形の漢字など——また特殊なルビなど……………一〇三

自然主義文学の漢字

岡 本 勲

- 1 はじめに……………一〇六
- 2 花袋と泡鳴の対照的な漢字使用……………一〇九
- 3 花袋の特徴……………一二三
- 4 漢学の教養の発露……………一二五
- 5 漢文訓読語の使用……………一二七
- 6 漢字と振り仮名の問題……………一三二
- 7 藤村・秋声の漢字の使い方……………一三六
- 8 むすび……………一三三

白樺派文学の漢字——有島武郎を中心に——

佐々木 靖 章

- 1 基礎的教養の三要素……………一三五
- 2 有島武郎の基礎的教養形成……………一三六

3	評論における漢字使用の特徴……………	二五七
4	創作における漢字使用の特徴……………	二五五

谷崎潤一郎の漢字・漢語——『細雪』の用字用語から—— 中村 邦 夫

1	『細雪』について……………	二六六
2	『細雪』における「和」と「洋」……………	二六七
3	『細雪』における漢字使用……………	二七一
4	『細雪』からみた日本語における漢語の特徴……………	二七五
5	現在からみた『細雪』の語彙……………	二八一

芥川龍之介の漢字——「羅生門」「鼻」を対象として—— 斎 藤 倫 明

1	はじめに……………	二八六
2	諸テキスト間での問題——第一の視点……………	二八七
3	作品内部での問題——第二の視点……………	二八九
4	第一の視点と第二の視点の結果から……………	二九三
5	時代との間での問題——第三の視点……………	二九五
6	典拠との間での問題——第四の視点……………	三〇四

新感覚派の漢字——川端康成の用法——

下河部 行 輝

1	はじめに.....	三二
2	対象としての作品について.....	三三
3	川端と漢字.....	三三
4	「バッタと鈴虫」における漢字.....	三四
5	「伊豆の踊子」における漢字.....	三九
6	おわりに.....	三八

写生文の漢字語

木坂 基

1	文章表現と漢字語.....	三〇
2	子規の「写生」観と写生文.....	三三
3	結合と音訓にみる漢字語の実態.....	三六
4	品詞別漢字語の実態.....	四〇
5	まとめ.....	四〇

近代詩における漢字

佐藤 伸 宏

1	はじめに.....	三五
2	上田敏『海潮音』.....	三五
3	日夏耿之介と萩原朔太郎.....	三六
4	おわりに.....	三七

近代文学と漢字

遠藤好英

1 はじめに

近代の文学作品に見られる漢字の実態を明らかにするについて、その目標は二点ある。第一点は、文学作品の中でどのような漢字使用にどのような変化や推移がたどられるかということであり、第二点は、前代の近世と後続の現代それぞれの文学に見られる漢字とくらべてどのように変わっているのかということである。第一点は近代の文学における漢字の変遷を、第二点は、国語史における近代文学の漢字の位置を、それぞれ考えることになる。

さて、近代文学における漢字の問題とはどのようなことが取り上げられるだろうか。漢字の問題は、基本的に形・音・義のそれぞれについて指摘され、近代文学の漢字についても同様である。その全体的状況をとらえ、国語史上の位置を考えるには、字種（異なり字数）や延べ字数を調べ、他の時代と比較することも効果的であるが、ここでは、基本的な問題を明らかにすることを目標に考えようと思う。

形に關して、近代当初は正体・俗体・異体などに、活字の問題も加わり、字体の問題を考えずには済まされない。明治期に作られた漢字も多く、国字にも問題がありそうである。形というよりは、漢字の用法についてといった方がふさわしいあて字の問題がある。あて字は近代文学に数が多く、その内容も多様であり、その吟味は、近代文学における漢字の特色を明らかにするのに最も大きい問題かと思われる。これも漢字の用法と言えるが、造語成分としてはたらく漢字が近代文学で数多く生まれている。どのような漢字がどのようににはたらき、どのような語を作るのかは、語彙の問題にも深くかわつて重要であると思われる。語として、あるいは語の一部として漢字は、漢音・呉音・唐音などに読みがきまっていたが、近代文学ではそれが変わつたり交代したりする。「女性」はニヨシヨウからニョセイ、さらにジョセイと変わるのである。「東京」もトウケイからトウキョウへと変わった。このような音の問題も、近代文学が話しことばによる言文一致文によつて書かれるようになって、いっそう多面的になつてきたと思われる。一語の中に音読み訓読みを含む重箱読みや湯桶読みの語の内容は、近代文学では一段と広がりを見せるが、それはどのようなものか、これを明らかにすることは、近代語の究明の上でも興味深い。外来語の漢字表記も近代当初において際立つて多いが、これら漢字の音だけを利用した典型的なあて字現象はどのような状況で、どのように推移するのだろうか。同じ外国語を受け入れるについて、漢字の意味を利用した訳語も作られている。この訳語は和製漢語となるものが多いが、これは日本人が漢字を、自主的な判断にもとづいて自由に使いこなしていることを示す。このような現象は、漢字の意味すなわち義の問題にもつながる。漢文訓読にはなかった訓、「認める」「極める」「叩く」「刷る」「話す」などが生まれているのである。このような新しい訓がある一方で、同訓異義の使いわけがなくなつてくる。「寝る」「寐る」の区別も作家により出入りはあるが、なくなつて「寝る」に統一を見る。このようなことが一何を意味するか。それは今まで述べた一つ一つの問題を考えるなかでこそ明らかになるであらう。ここでは、個々の問題を国字・字体・あて字・白話由来の漢字を中心に考察を進めることとする。

以下の考察にあたつて、近代文学における漢字の実態を探るには、言文一致文に始まり、それが成長発展し口語文として完成を見る近代文章の流れに沿つて作品を取り上げていきたい。作品としては、山田美妙の『夏木立』、二葉亭四迷の『浮雲』、田山花袋の『田舎教師』、武者小路実篤の『或る男』などを主なものとする（いずれも、新選・精選名著複刻全集、近代文学館所収の初版本をテキストとした。『浮雲』の第三篇は、『都の花』所載の第四卷第十八号、第十三回、第十九号、第十六回、第十七回、第二十号、第十八回、第五卷第二十一号、第十九回、それぞれ載つた初出のものをテキストとした。それ以外の作品を利用する場合も、なるべく新選・精選をも含めて近代文学館所収の初版本ものを使い、それがない作品の場合には、筑摩書房刊の明治文学全集本または現代日本文学全集所収のものを使い、ときに、作家の全集本の本文によつたものもある）。

なお用例の引用に当たつては、問題にする字や字体以外は現在通行の字体に改めた。作品名や国名等も同様である。

2 漢字表記の混乱から統一へ

① 混乱の様相とその背景

近代文学の当初において、漢字表記はまことに多様である。同じ字や同じ語が、いろいろに書き表されているからである。江戸戯作の名残をとどめる『安愚楽鍋』は、変体がなを使い、くずし字・異体字を多数用いている。これを別としても、言文一致文創始の榮譽を担う『夏木立』『浮雲』にさえ、それが指摘できるのである。今、これらと同じころの作、尾崎紅葉の『^二比丘尼色懺悔^一』（明治三年刊）について一瞥すると、同じ字についてつぎのような字体のちがいが見えるのである。

裏切る	裏切 ^う る	歸 ^{かへ} る	顔 ^{かほ} 一顔	齧 ^{かみ} 裂 ^さ く	齧 ^{かみ} 占 ^{しめ} て	御座 ^{ござ} る	御座 ^{ござ} る	答 ^{こた} へ	勿体 ^{ふてい} 一勿体 ^{ふてい}
-----	-------------------	-------------------	--------------------	----------------------------------	-----------------------------------	--------------------	--------------------	-------------------	--------------------------------------

同じ語を表して、別字が同じように用いられている例も多いのであるが、これには同訓異字以外に、同訓異義の問

題もかわり別種の問題となるので、ここでは扱わないこととする。

字体のちがいにだけ問題を絞り、『色懺悔』の漢字表記を現在の表記とくらべてみると、まさに混乱した状況といえる。つぎのような字体が指摘されるからである。

暇^{いとま}腕^{うで}、恐れ^{おそ}、鬼^{おに}陰^{かげ}、薰^{かほ}て、身^み搦^{なめ}、吳^ご起^ぎ、此^こ處^こ、奇^き異^いな、健^{けん}固^こ、殺^{ころ}す、八^{はち}歲^{さい}、酒^{さけ}、障^{さや}り、死^が骸^{がい}、秘^ひ藏^{ざう}、輜^し輶^よ、
勝負^{しやうふ}、若^{じやくはい}輩^{はい}、記^し章^{しょう}、不^ふ審^{しん}、草^{くさ}摺^{ずり}、體^{たい}、耻^ち辱^{じやく}、契^{ちぎ}、按^{なげ}る、腰^{こし}拔^は物^{ぶつ}、望^{のぞ}む、滅^{めつ}、腹^{はら}、船^{ふね}、骨^{ほね}、養^{やう}ふ、寄^よ掛^{かけ}、沓^{くさ}み、
宜^{よろ}士^し、小^こ脇^{わき}、譯^{わけ}

このようないろいろな字体を含んで、『色懺悔』をはじめとした二〇年代の初めごろの作品は、多様な漢字表記の様相を見せることになる。この多様さとはどのようなことなのかその理由を考えると、大きくつぎの六項目が考えられる。以下にそれを示すが、例は漢字一字ずつとした（熟語の形でないとわかりにくいものは熟語の形で示した。出典は、多くの作品でよく見る字体の場合には省略した）。

(1) 俗体を使う（正体をかつこ内に示した）

涼（涼） 減（減） 坐（坐） 拔（拔） 研（研） 屏（屏） 做（作） 耻（恥） 柿・柿（柿） 帽（帽） 微

（微） 鉢（鉢） 垂（垂） 寧（寧） 逃（逃） 強（強） 紅^{くれなゐ}蓮（^{あざ}忘）（『色懺悔』） 濶（闊）（『田舎教師』） 虚（虚）

(2) 同字とされるものを使う

歸—皈 韻—韻 烟—煙 貌—只 煮—煮 罕^{まれ}—希 勿—恩 瘡^{やせ}—癰我慢（『浮雲』） 智—胸 畧—略（『夏木立』）

(3) 正字を使う（かつこ内は現在の字体）

帽（帽） 蓋（蓋） 喉（喉） 鄰（隣） 隔（隔） 屈（屈） 犧（犧） 牲（『田舎教師』） 鹽（塩）

(4) 本字や古字を使う（かつこ内は俗字）

亾（亡）—父 宿（宿） 浮艸（草） 下艸 艸花 言艸（以上いずれも『浮雲』） 毒艸（『あめりか物語』） 插（挿） 芴^{かた}

(旁) 付ける (『浮雲』 鯨 (嗅) ・ 仝 (同の古字) (『夏木立』)

右のうち「鯨」はつぎのように見え、「鯨」は『字彙』に俗作_レ嗅とある。

①美人の香をは鯨_{みぎ}分けるよ。(『夏木立』 柿山伏)

(5) 省字や略字を使う

体 (體) 巾 (幅) 匆 (忽)、

「体」は『正字通』に「体 俗書、四體之體、省作_レ体」と見える。

(6) 誤字を使う——これは、つぎのような場合である。

②今文三の説話を_{はなし}聴て当惑をしたも其_{その}筈の事で (『浮雲』一ノ三)

「聴」は笑うさまを意味する字で、『通俗編』には「聽」とするのは譌字_{カマツ} (誤字に同じ) であるとする。同じ『浮雲』には、発語のことばとして「掬_{さく}」と「偕_{さい}」を使うが、「偕」は『五字通』に「撻」の譌字とある。

以上の六項目は、字体について『大漢和辞典』所載の字書『正字通』『字彙』などの記述に、正字・本字・俗体など指摘するのによって考えたものである。これらは社会的な広がりをもつ一般の理由といえる。これに対して、作家個人による特殊な理由が考えられるつぎのような場合もある。

(7) 恣意・思いちがいなどによる誤字

③「……如何_{どう}しても遣_{はな}らなかつたら子不肖_{ふしやうぐ}々に五十銭取ッて仕舞ッて子 (『浮雲』二ノ七)

④叔母一人の機_きに入ればイザコザは無いが、(『浮雲』一ノ二)

⑤_{かぶりいっ}簪は毎もより淋しい。(『平清盛』十八)

③④の例はそれぞれ「不承」と「氣」に通用させたものである。⑤の「簪」は振り返名からは「簪」を書くのが普通である。「簪」は『大漢和辞典』に見えないが『大字典』で「簪」を「簪」の略字に用いるとする。